

朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識

渋谷 鎮 明

- I. はじめに
- II. 朝鮮(李朝)時代における地形認識
 - (1) 風水地理説と地形認識
 - (2) 朝鮮全土の山に対する認識——「看龍法」的認識
 - (3) 邑周辺の地形の認識——「蔵風法」・「形局論」的認識
- III. 現代韓国村落における風水的な地形認識
- IV. むすび

I. はじめに

近年、風水地理説に関する研究が各研究分野において、盛んに行われるようになってきている。日本においては沖縄を中心とした研究がおこなわれ、また朝鮮半島や中国に関してもさまざまなテーマによる研究が蓄積されつつある。

本稿で扱う朝鮮半島における風水地理説に関する研究も、やはり増加しつつある。大まかに整理すると、風水地理説そのものの特性や論理構成、歴史的展開を明らかにするもの¹⁾、都邑・村落、建築物などへの風水地理説の関与を問題とするもの²⁾が多いように思われるが、また純粹に風水地理説のみを主題としない研究も含め、韓国人の基本的な環境観・地形観であるとか、あるいは伝統的な環境利用の方法として風水地理説に言及するものもみることができる³⁾。韓国の地理学者のなかでは、風水地理説全般について研究を進める崔昌祚や、風水地理説の歴史的展開や現代社会における風水地理説の様相についてまとめた李夢日などが研究をリードしている。それ以外にも、伝統的な都市や村落と風水地理説との関連、朝鮮時代の地理書・地図にあ

らわれる風水地理的な記述・表現などに関する研究が地理学で行われている。また近年韓国では、高校の地理教科書に風水地理説が伝統的地理思想として掲載されるなどのことを通して、風水地理説に関する肯定的評価が行われるようになってきている。

筆者は前稿で朝鮮半島において、中国を起源とする風水地理説が邑集落の立地や空間配置に及ぼす影響について考察したが⁴⁾、その研究を通して風水地理説による地形認識が朝鮮半島において非常に多く行われていることを理解するようになった。本来、集落・建築物・墓地の立地や方向を決定するために風水地理説は使用されるが、その前段階として、周辺環境を風水地理的な認識方法で観察し、解釈する、いわば「見立て」を行うことが必要であり、その後初めて具体的な立地、配置が決定される。従ってそこで行われる見立ては、風水地理説の論理で集落や墓などを造成する場合、非常に重要で基礎的な作業であると考えられる。とくに風水を用いて家屋や墓地の立地や配置を選定する風水師はまず見立てを行う能力が必要とされるであろう。

その上見立てはそのような準備作業にとどまらず、朝鮮半島において重要な地形認識の方法として用いられていたと考えられる。例えば朝鮮半島の風水地理説の展開について研究を行った李夢日は風水思想研究の「現代地理学的意義」を主張する中で、「地域地理学的意義」として風水が現代地理学の導入以前までの韓民族の国土観であると共に場所性の創造原理であったと記しており、さらに現代韓国の農村において、風水地理説が周辺環境認識の方法として用いられ

ていることも記している⁵⁾。また1987～88年、1993年に筆者らが行った韓国農村の予備的調査でもいくつかの農村で、風水用語を用いて周辺の山や河川を説明された経験があり、見立てが地形認識に用いられる例は現在でもかなりあるのではないかと推測できる。なお、ここでいう「認識」は、一部の研究にあるように、研究者がある地域の地形を風水地理説で判断するのではなく、基本的に居住者のもつ認識である。

ところでこのような見立ては当然朝鮮(李朝)時代(1392～1910年)にも行われていたと思われる。たとえば日本時代の朝鮮半島の風水地理説について詳細な研究を行った村山は、朝鮮半島の多くの都邑で、その基地(場所)の形が何に類しているかが問題とされ、その形状の如何によって吉凶を論じる「類形観」がみられることを指摘し、当時の朝鮮半島各地の都邑の類形の事例を豊富に示している⁶⁾。これはやはり周辺の自然環境を風水的な用語で認識しようとするものであると考えられる。村山の研究は1931年に発表されており、また朝鮮時代の地理誌から事例を引いているので、朝鮮時代末期には既にそのような「類形観」が存在していたと考えられる。

このような地形認識の方法は、風水研究のみならず、朝鮮半島を含む東アジアの歴史地理学的事象を取り扱う際に重要であると考えられる。まず、このような認識が少なくとも朝鮮時代から行われている、朝鮮半島における伝統的な環境観である点である。そしてこの環境観は、現代にまで受け継がれているという点で重要であり、またこれを明らかにすることは朝鮮半島のさまざまな地理的事象にアプローチする際に有用であろう。たとえば昨年出版された「東アジアの国家と社会」シリーズの『北朝鮮』では、金日成支配体制を論じる中で、儒教の影響とともに、金日成に関する「神話」が地脈、白頭山信仰、精気などといった風水と密接に関連する概念を巧みに取り込んでいることを指摘している⁷⁾。これは風水地理説に支えられた環境観が朝鮮半島においてかなり根深いものであることを

示している。

またそれに関連するが、風水地理説は多少の相違はあるものの、朝鮮半島以外の中国、台湾、香港などの漢民族が居住する地域、あるいはベトナム、あるいは中国周辺の少数民族の居住する地域で同じような方法で用いられており、ここで扱おうとする地形認識の方法が他の地域でも行われている可能性が高く、その共通点・相違点を探ることは東アジアに共通する地形観を探るための一助となるであろう。

しかし、朝鮮半島の風水地理説に関する研究では、これまで一部の研究を除いて⁸⁾、風水地理説を用いた見立てを地形認識の方法として積極的に捉えた研究が少なく、風水地理説のもう一つの重要な役割として、風水地理説による地形認識の特性を明らかにすることは意義深いと考えられる。

以上のことから、ここでは朝鮮半島における風水地理的な知識を用いた地形の認識方法の特性を、歴史資料と現代の村落での認識から明らかにすることを目的とする。

具体的には、朝鮮(李朝)時代末期にあたる1800年代末に編纂された各道邑志の①山川條の記載、②同時期に制作された『大東輿地図』の描写方法などから、当時の地形に対する認識について明らかにしたのち、③現代の韓国集落における認識を通して、一般の集落レベルでの認識方法について明らかにする。

II. 朝鮮(李朝)時代における地形認識

(1) 風水地理説と地形認識

風水説は本来、中国を中心とする地域において行われるもので、都城、集落、住居、墓地などの立地や空間配置を、周易や陰陽五行説を基準としながら、選定する方法である。そのうち朝鮮半島の風水説については、著名な風水書を中心とした分析から、崔昌祚が、その方法を6つに分類し、整理している⁹⁾。

崔昌祚は風水の方法を以下の6種に分類した。まず、山のつながりや山の形を判断する「看龍法」、 「穴」付近の周囲の山勢を判断する「藏風

表1 朝鮮時代地理誌の山川條に用いられた風水用語

【新增東国輿地勝覽】 (1530年)	【輿地圖書】 (1757年)	【邑誌】 (1871年)
鎮山	鎮山	主山(鎮山, 主龍, 主脉, 主峯) 案山(案対, 外案), 祖山(祖宗) 小祖山, 青龍(左龍), 白虎(右虎) 水口

法], 川などの水系の流れる方向, 形態を判断する「得水法」, 風水説で集落や墓地などを造るべきところである最も重要な「穴」を示す方法である「定穴法」, 地形の形態を字, 動物, 物体などにたとえて吉凶を判断する「形局論」, 建築物, 墓などの方位を決定する「坐向論」である。本稿ではこれ以後この分類を利用しつつ, 地形認識の方法を検討する。

風水説による地形認識は朝鮮時代の歴史的資料にもしばしばあらわれる。それらはおもに①官撰・私撰の地誌類, ②古地図類, ③「扱里志」などの地理書¹⁰⁾, ④風水書などであると思われる。これまで特に指摘されてきたものとしては, 朝鮮時代前期の地誌である『新增東国輿地勝覽』の山川條¹¹⁾, 朝鮮末期に作成された金正浩の『大東輿地図』¹²⁾, 『扱里志』¹³⁾などであろう。しかし, 朝鮮時代後期から末期に多く刊行された地誌である邑誌に言及した研究はあまり見られない。

朝鮮時代中期の『新增東国輿地勝覽』, 『輿地圖書』などの地理誌と, 朝鮮後期の邑誌を比較すると, 風水にかかわる記載が増加している。朝鮮時代中期の1530年に完成された『新增東国輿地勝覽』では, 邑の背後にあり, 風水上重要な「鎮山」のみについて山川條に記載があり, 山名, 邑からの距離・方角が記されている。また朝鮮時代中期の『輿地圖書』も同様に鎮山のみが記載されている。それに対し, 朝鮮時代末期の1871年前後に編纂された邑誌では, 一部の邑の記載に, 鎮山以外にも, やはり風水の用語である案山, 青龍, 白虎, 水口, などの語(空間的な位置関係は図4参照)や, 山のつながり方, 風水師の言葉の引用などが記されている例が見られるようになる(表1)。

そこで本章では, 風水地理説に関する事項が歴史的資料によく現れる朝鮮時代末期の邑誌, 特に全国的に発行年が揃っている1871年前後の邑誌と, 『大東輿地図』に見られる記載や表現に現れる風水的な地形認識について明らかにする。

(2) 朝鮮全土の山に対する認識——「看龍法」的認識

まず朝鮮半島全体の地形認識について検討すると, 朝鮮半島を何かに見立てる「国域風水論」¹⁴⁾などもあるが, とくに重要であると思われるのは, 李朝末期に完成した金正浩の『大東輿地図』, あるいは「青丘図」などに典型的に表されるような, 朝鮮半島全体を白頭山を出発点とする尾根線の体系として認識する方法であろう。

これは上記の崔昌祚の分類に従えば, いわば「看龍法」的認識であると考えられる。看龍法では, 白頭山は朝鮮半島の全ての山の祖先(祖山)であるとの認識があり, また逆に白頭山から朝鮮半島の全ての山へ尾根線(脈)がつながっており, そこを「生氣」が流れて行くと考えられている。また済州島は朝鮮半島から離れた南の海上に位置しているが, 李重煥の『扱里志』では, 現在の韓国南部にある智異山から海の下を脈がつながっていると述べられており, 国土全体を白頭山から始まる体系に組み入れていることが分かる。

『大東輿地図』は, 朝鮮半島全体を, 山のつながりと水系によって枠組みを構成しつつ表現した, 特殊な表現形態を持つ地図である(図1参照)。この地図は朝鮮時代末期にあたる1861年頃に金正浩によって作成され, 地図全体は, 横に長い22葉の短冊状に分割され, 山と水の他には地方行政拠点である邑の位置, 城, 交通路,

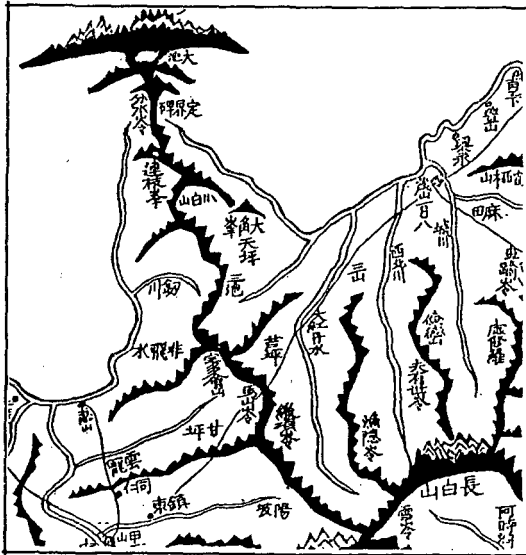


図1 大東輿地図の表現方法(白頭山付近)
(脈(稜線)が黒の太線で示されている)

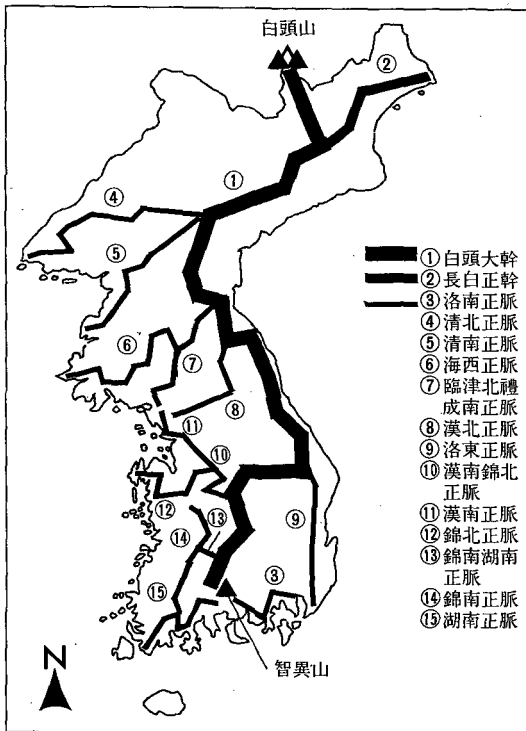


図2 山経表に示された山の体系
(大東輿地図を原図とする)

行政区画などが記されている。これを見ると、朝鮮半島の山は半島の根元、中国との国境付近

で鴨綠江と豆満江に挟まれ、中国とつながっているのはちょうど白頭山の部分だけになっている。またその白頭山は中国の崑崙山からつながっているとされており、従って白頭山は崑崙山から唯一つながっている場所であり、風水的にも重要な場所であるということが出来る。そして白頭山から半島の各地まで山脈が繋がられて描かれている¹⁵⁾。これはやはり風水説との関連が推測される。すなわち、朝鮮半島の祖山である白頭山から各地の山へと生氣が流れて下っているという思想が深く浸透しているということである。この氣の流れる山の稜線と、氣を止める河川を中心に描く表記法はきわめて風水的であるといえるであろう¹⁶⁾。

この白頭山からの脈が半島各地の山々へつながるという認識と沿うようにして、朝鮮時代末期に作られたと思われる『山経表』¹⁷⁾には白頭山を祖山とした山々のつながりが、ランクづけをとまって記されている。図2のように白頭山から韓国南部の全羅道と慶尚道の境界にある智異山にいたる半島の中心をなす稜線が白頭大幹として最もランクが高く(図中①)、次に白頭大幹から豆満江方向につながる稜線を長白正幹(図中②)、そしてその他の地域毎に中心になる稜線は「○○正脈」という名称で記されている。その表記方法は韓国の同族集団(門中)の家系図として知られる族譜と同様の表記法で記されている。従って、白頭大幹が、族譜の宗家系の家系に該当し、そこから分かれていく正幹、正脈が、族譜での子孫の分派の表記法で記されている。また族譜では名前が記されるべき欄には、山の名前が記されている(図3)。

以上のような『大東輿地図』と『山経表』などにあらわれる「看龍法」的認識は、詳しくは後に述べるが、現代の村落でも周囲の自然環境を風水説で認識する例があるがその際にもみることが出来る。この認識方法で特徴的なことは、①祖山とされる名山から「脈」、即ち尾根線・稜線が繋がっていること、そして特に「山経表」では②その尾根線がある方法で体系化されていることがあげられるであろう。また③そこで体

山 經 表		茂山	甲山	富峯	楢川	咸
白頭山	白頭山 麟脂峰 盧項嶺 寶多會沙伊峰 緩項嶺 瀉隱嶺 圓山	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里
大有峰	大有峰 甘土山 南嶺山	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里
盧隱洞	盧隱洞 羅漢馬 何方德	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里
馬騰嶺	馬騰嶺 掛山嶺 黃土嶺	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里
檜義德	檜義德 開花嶺	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里
龍雲山	龍雲山 板幕嶺	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里	茂山西北三百里

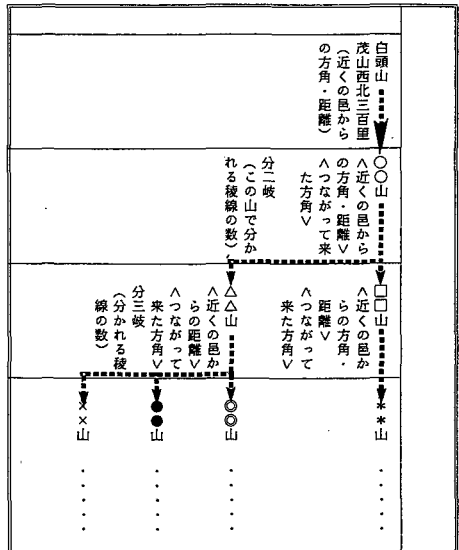


図3 『山經表』と表現方法

系化された尾根線には元と末があるように思われる。即ち、白頭山という元があり、それが半島各地へ樹状図のように広がり、各々の末端に各地の主山とされるような山があるという認識があるのではないかとと思われる¹⁸⁾。

(3) 邑周辺の地形の認識——「葦風法」・「形局論」的認識

邑は、朝鮮(李朝)時代の地方行政拠点の総称であり、邑集落とも称される。朝鮮時代(1392~1910年)の地方行政制度は、太宗13年(1413)の改革でほぼ完成し、全国は八つの道に分けられ、さらにそれが府、大都護府、牧、郡、縣などの約330前後の数の行政単位に分割され、現代の行政単位の骨格になっている。その行政単位の一つずつ役所が置かれたが、その集落が邑である。

そして一つの行政単位毎に沿革、山川、役所や寺院などの所在、人口などのさまざまな地誌的な項目についての情報が記載されたものが邑

誌である。邑誌は、16世紀後半から作られるようになった地誌であり、基本的には国家の命令によらずに作られたものを指す。また邑誌には一つの道ごとに収集・編纂された「道誌」と一つの行政単位ごとに作成された「郡縣誌」がある¹⁹⁾。特に時期的に揃っており、資料価値の高い「道誌」は18~19世紀に作られたものが多い。とりわけ19世紀後半の高宗の時代(1863~1907年)である、1871、1895、1899年に編纂された邑誌は時期が遅いために現存するものが多い。

本節では邑誌の中でも、1871年前後に完成した邑誌の山川係を検討することで、そこに記されている風水的な地形認識を明らかにしたい。

山川係の記載は、基本的には主要な山名、河川名が記され、一つの山・河川ごとに邑から方角と距離が記され、場合によってそれ以外の記載がある。その中で、いくつかの点で風水の影響を受けたと考えられる記載があるが、それは大きく三つに分けられる。第一に山のつながり方を記した部分であり、第二には風水用語とし

表2 1871年邑誌(山川條)にみられる風水的認識

	京畿	忠清	慶尚	全羅	黄海	江原	咸鏡	平安	計
邑の総数	35	51	63	53	22	26	24	44	318
山のつながりが示されている邑	13	35	49	28	16	17	18	16	192
風水用語が一種類以上用いられている邑	21	28	53	40	20	23	15	28	228
主山・鎮山のみ記されている邑	16	21	43	30	13	16	9	17	165
主山・鎮山以外の記載がある邑	5	7	7	10	6	6	5	9	55
案山の記載がある邑	3	5	3	6	2	5	2	3	29

てよく使われる、玄武・朱雀・青龍・白虎の「四神砂」と「主山・案山・朝山」,「水口」などの用語によって周囲の地形を認識している部分である。そして第三には、崔昌祚の分類で「形局論」と記されるような、一種の「見立て」が記されている例である。

まず山のつながり方についての記載であるが、邑によって山名の後に、「自□□(地名)○○山来」と記されることがある。これはその山がどこの山からつながっているのかということが記されているのである。例えば、慶尚道の慶州の山川條をみると、28の山について記載されているが、その全てにその山はどこからつながっているかについて記されている。そしてその冒頭に記される馬北山は、「在神光縣東二十六里自青松狐峴来・・・」と記され、山の所在を示した後行政区域としては青松都護府にある「狐峴」から連なっていることが記されている。このような記述は、318の邑のうち、約6割に当たる192の邑において見ることができる(表2)。

これには、前節でも触れたように、朝鮮半島の山は白頭山を始まりとして、すべてつながっているという認識が影響していると考えられる。またそのつながり方は、白頭山から末端部へつながるとい認識がある。上記の馬北山に関する記載でも、より白頭山に近い北側の山とのつながりのみを示している。また崔昌祚は、実際に風水に基づいて建築物を作る場合にも、本来は白頭山からの山のつながりを検討すべきであるが、実際には近くの名山までのつながりを参考にするという原則について言及しているが²⁰⁾、

そのような作業には、ここで示したような認識は必須のものであったであろう。

次に風水用語による地形の認識についてであるが、318の邑のうち、表2に示したように多少なりとも風水の用語を用いて周囲の地形を示しているものは228にのぼり、全体の7割を超えている。その内容は、風水を考えるうえで重要な「主山(鎮山)」がどこであるかを示すものが多く、全体の約半数の邑で記載があった。しかしそれ以外の用語を用いた地形の認識は、2割弱の邑で記載されているに過ぎなかった。しかし全体として用いられる風水用語の種類は多く、主山(鎮山・主脉・主龍・主峯)、案山(案対)、祖山(祖宗)、小祖山、青龍(左龍)、白虎(右虎)、水口などの風水用語が用いられている。そして例は非常に少ないが、特定の邑ではこれらの用語を豊富に用いて周囲の地形を認識している。

たとえば、忠清道の洪州(現在の忠清南道)の邑誌には、日月山を「邑之主山」、鳳首山を「邑之案山」、八峰山を「邑之左龍」、烏棲山を「邑之右虎」と記され、風水用語によって周囲の地形が捉えられ、図4に示したように東向きの形局が認識されている²¹⁾。

上記の四神砂に該当するような、用語による認識がある一方で、上述の「形局論」を用いた認識、すなわちある地形をも物や動物などに喩えて表現する例がみられる。たとえば、朝鮮半島南部の全羅道の名山である智異山の南麓に位置する求禮の邑誌には、主山である鳳城山が飛鳳抱卵形(鳳凰が卵を抱く形)であると記して

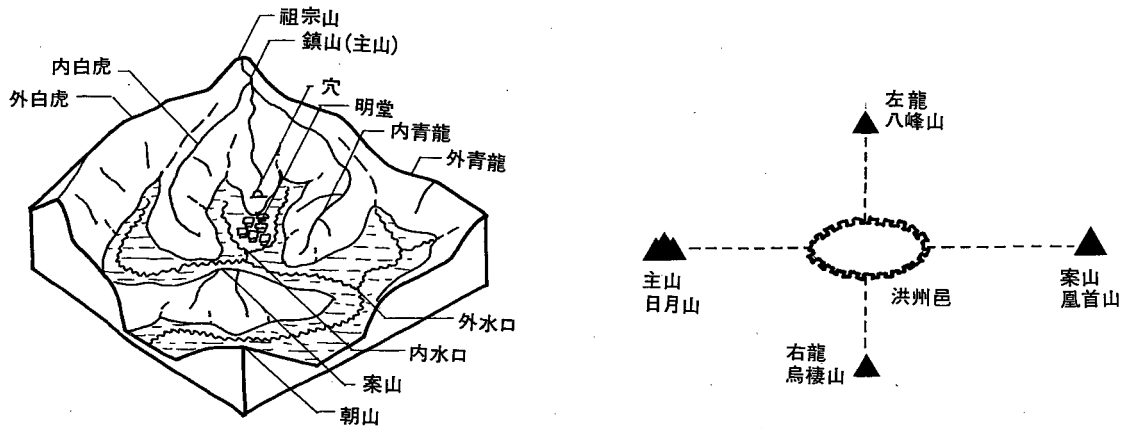


図4 風水地理説による理想的な地形と忠清道洪州牧の地形認識

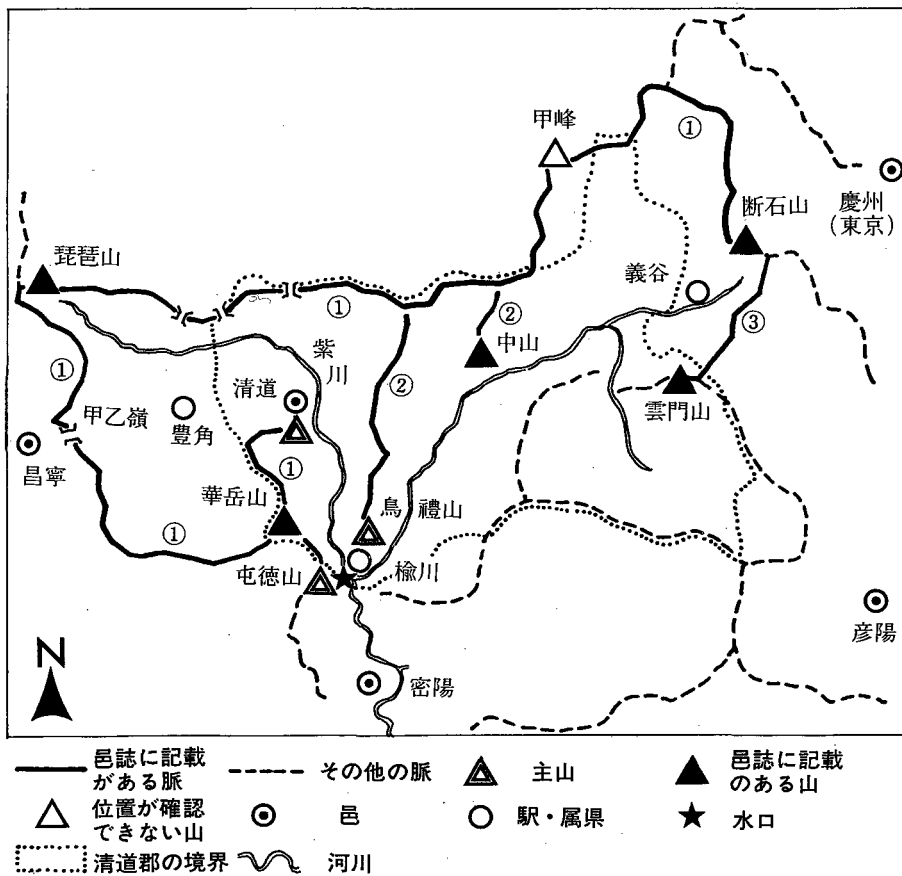


図5 清道郡誌にみられる地形認識

(大東輿地図を原図とする。また邑・駅・属県、河川は郡誌に記されたもののみを記入した。また「甲峰」の位置が確認できなかったが、周囲の山々との関係で位置を推測)

いる。他にも同じ全羅道の淳昌、慶尚道の晋州、順興などで同様の記述がなされている。また以上のような風水的な地形の認識を記述するにあたって「風水家以為・・・」であるとか「堪輿家曰・・・」などと風水師の言であることを示す場合もある。

このような風水的な地形認識は、邑によって記述の度合が異なるが、一部の邑誌にはかなり詳細に記されている。特に慶尚道の清道では、ここまで記してきたような認識方法をすべて用いて周囲の地形を表現している。清道の邑誌は他の邑誌とは異なり、山川條とは別に序文のような体裁で周囲の地形を描写している。そこでは、冒頭に隣の邑（慶州府）に属する名山から清道の邑集落の主山へのつながりが記され、その次にそれらの山々に囲まれた地域の河川について述べ、その後一度郡の歴史に触れ、さらに邑集落近くの地形について形局論的な事項を述べている²²⁾。

山のつながりは、図5に示したように大きく分けて三つ記されており、第一に、隣の邑である慶州府にある断石山の「大幹龍」の一枝が、甲峰、そして省峴、八助峽、栗峴の三つの峠を経て琵琶山へ至り、そこから南へつながる一枝が甲乙嶺、屯徳山、華岳山を経て、清道の邑集落の背後にある鰲山にいたる（図中の①）。次に甲峰で①から分かれた一枝が中山を経て鳥禮山に至る（図中の②）。さらに断石山のまた別の一枝が義谷駅の背後をとおり、雲門山につながっている（図中の③）。これは清道郡の郡域をちょうどカバーするように稜線を押さえている。そしてここに記された山々のうち、それぞれ甲峰は邑の小祖山、屯徳山は清道郡の南に接する密陽都護府の主山、鰲山は清道の主山、鳥禮山は楡川駅の主山とされ、また鳥禮山と屯徳山に挟まれた部分を水口ととらえている。すなわち上記のような山のつながりの中で、風水用語による山の位置づけがなされているのである。

その後図中にも記したように琵琶山から流れ出す紫川と慶州府との境、雲門山付近を源とする河川が水口である楡川付近で合流している

ことを述べ、再び水口に触れている²³⁾。さらに最後に役所のある場所（官基）の地勢が仙人掌形であり、また主山（鰲山）が飛鳳形であるとし、形局論的な「見立て」をも記している²⁴⁾。

このように清道郡の邑誌には、ここまで記した「看龍法」的認識、「葢風法」的認識、「形局論」的認識を見て取ることができ、地形の認識に風水を用いた一つの好例を示しているといえる。またここでは、これまで「四神相応」の概念として知られる青龍・白虎などの語と比して、風水用語として取り上げられることの少なかった「水口」という概念が用いられ、それは河川が合流し、山の狭まる特徴的な地形を指し示していることが明らかになった²⁵⁾。

本節では邑誌の山川條の記載を中心に、邑集落の周囲の地形の認識について述べてきたが、崔昌祚の分類を用いれば「葢風法」的な認識といえる、主山、案山などの風水用語を用いた認識と、「形局論」的認識と考えられる、周囲の地形を全体として「〇〇形」と、何かの形に喩える認識という二つの方法をここでは捉えることができた。またその一方で、前節で示した、山のつながりを捉える「看龍法」的認識もかなり詳細に行われていることが明らかになった。

III. 現代韓国村落における風水的な地形認識

冒頭に述べたように、風水を用いた地形の認識は、朝鮮時代の歴史的資料のみではなく、現代の韓国村落においても見ることが可能である。李夢日は慶尚道慶州郡江東面良洞里、および軍威郡華山一帯において、現地調査に基づき住民の「風水地理的空間認識」を明らかにし、上記の分類を用いれば、「形局論」的認識が見られることを明らかにしており、それを風水の「地域地理学的意義」としている²⁶⁾。現代韓国農村においてもこのような風水を用いた地形認識が広く行われていることが予想できる。

そこで、ここでは上記のような歴史的資料にみられる認識方法が現在どのように用いられているかについて、筆者の調査による韓国の慶尚道密陽郡府北面退老里と、濟州道北濟州郡旧左

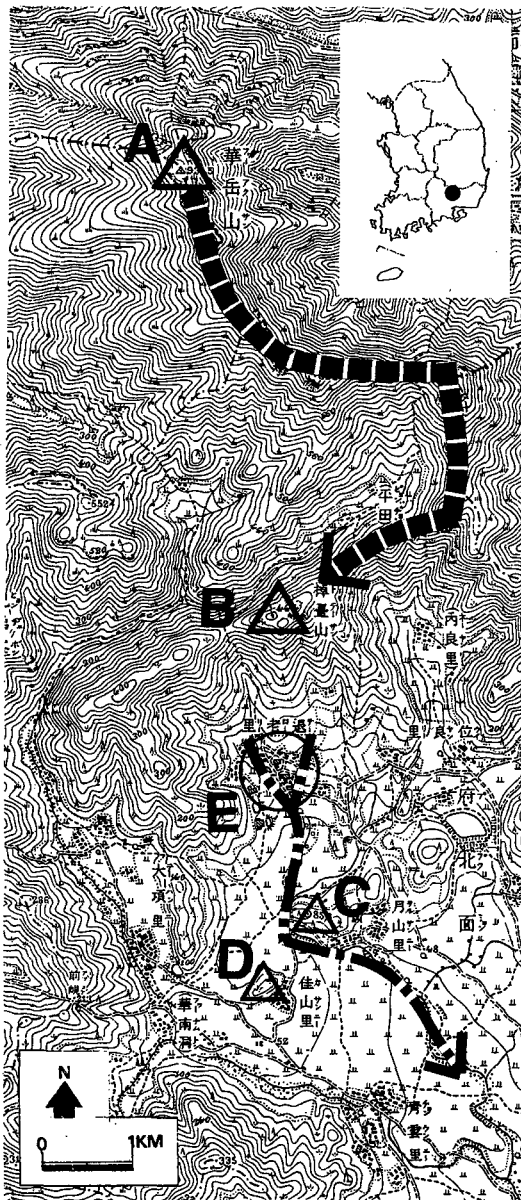


図6 慶尚南道密陽郡府北面退老里における地形の認識

A：華岳山(鎮山) B：トツテ山(主山)
C, D：村の入口の山 E：退老里

面吾照里における地形認識の事例をあげながら明らかにする。

まず、慶尚南道密陽郡府北面退老里では図6のような認識がなされている。退老里の集落は、韓国東南部、慶尚南道に属し、大都市の大邱と

釜山の間位置する小都市密陽の北5 km ほどの場所に位置しており、北、東、西を山に囲まれている。集落の周辺には亭子などの歴史的建築物が多く、朝鮮時代に支配階級である両班が居住した、いわゆる「氏族村」ということができるであろう。

退老里での風水地理説を用いた地形の認識は次のようであった。①この村の鎮山は集落の北側にそびえる華岳山であり、そこから稜線のつながっているトツテ(帆柱)山が村の主山となる。また、②この村は風水説でいう「行舟形」であり、舟が進んでゆく形局をしているといわれている。そのため、舟には帆柱が必要であり、そのため主山がトツテ(帆柱)山と呼ばれている。また、③村は背山臨水の地に立地しており、青龍・白虎の認識はみられなかった。また、現在村の前方、南側には貯水池がつくられているが、④その貯水池の堤防の両側に位置する二つの小山は村の入り口を押え、村を守っている。⑤また、村は、背後の山から流れ出る二つの水系が合流して村落外に流れ出る地点に位置し、これが風水的にみて非常によい場所であるとの認識もある²⁷⁾。

これらの認識をみると、前述の認識方法のうち、蔵風法的認識が希薄であるが、①にみられるような看龍法的な認識、②のような形局論的認識がみられ、それ以外に、水系に関する認識、歴史的資料からははっきりと現れなかった得水法に関する認識もみることができた。

次に、済州道北済州郡旧左面吾照里の例を示す(図7)。吾照里は、韓国本土から南西に離れた済州島の東部の沿岸に位置しており、村の東側には入り江をもち、漁港になっている。村落の周囲は低い丘陵と済州島特有の寄生火山に囲まれている。また吾照里はかつて北東に1 kmほど離れた海岸沿いにあったが、風が強いことと倭寇の侵入のために現在の位置に移動した。その際には風水説を参考にしながら立地位置を定めたとされている²⁸⁾。

ここでの周辺環境への認識は以下のようなものである²⁹⁾。

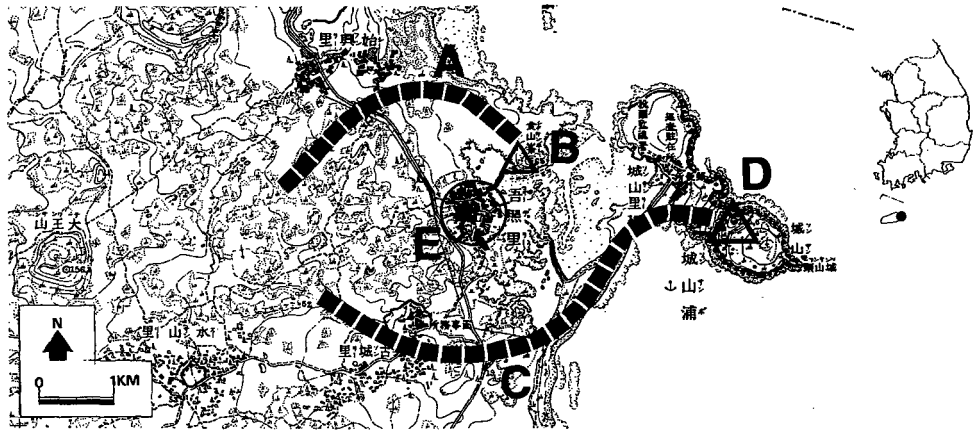


図7 済州道北済州郡旧左面吾照里における地形の認識

A：青龍，B：食山峯，C：白虎，D：城山日出峯，E：吾照里，
★：風水的によい場所

まず、①済州島の中央部には漢拏山と呼ばれる標高1950メートルの名山がそびえているが、そこからつながった稜線が集落の背後までつながっており、②集落の背後で稜線は別れ、青龍と白虎になり、青龍は食山峯に至り、白虎は集落南側の低い丘陵を経て城山日月峯につながっていると考えられている。③また村の北西側にあり、青龍と考えられている食山峯は、「玉女散髪形」とされ、それに関する伝承がある。さらに村の中には風水説でみて最も「よい場所」が存在しているということである。位置的には、村の西部の少し小高いところにあるが、風水説の理想図である山局図と比較すると、明堂、あるいは穴に該当するような位置にその場所があることがわかる。従って、①、②のような地形の認識にしたがってその場所が良いと判断されたと思われる。この吾照里では前述の認識方法をすべて用いて、周囲の自然環境を把握している。但し退老里でみられた水系に関する風水的な認識はみられなかった。

上記の二つの例を見ると、前章で見ることのできた「看龍法」的、「藏風法」的、「形局論」的認識が盛んに行われている。ただ退老里では青龍、白虎といった用語を用いた認識がみられず、若干藏風法的認識が弱いように思われる。一方吾照里では、上記の3つの認識方法が用い

られており、その上に風水地理説では「穴」というべき最もよい場所が認識されているという点が注目される。

またこのような認識の主体について簡単に触れておくと、退老里では風水用語によって村落の周囲の地形を説明し得たのは、一部の年配の層であったが、吾照里では、年配の層をはじめとして、一部の若年層（20～30代）でもこのような認識に関する知識を備えていた。

IV. む す び

本稿では、朝鮮半島における風水地理説を用いた地形認識について、朝鮮時代末期の地理誌・地図と、現代の韓国農村の事例研究を通して、その認識の方法とその特性について検討してきた。

まず朝鮮時代の代表的な地図である大東輿地図では、崔昌祚の分類によれば、看龍法に該当するような白頭山からの山のつながりを重要視し、山の稜線（脈）を全て連続させるという特殊な表現がなされており、さらに「山経表」では、主要な脈ごとに名称と等級がつけられている。また1871年邑誌の山川條には、崔昌祚の分類では上記の看龍法的な認識の他、藏風法、形局論に該当するような認識が行われ、慶尚道清道の邑誌では、それらが組み合わされて用いら

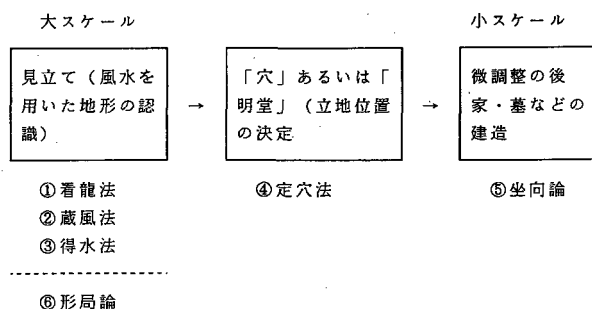


図8 風水地理説の方法の分類と地形認識の関係

れ、地形と郡の領域が捉えられていた。

次に韓国の慶尚南道密陽郡府北面退老里と、済州道北済州郡旧左面吾照里では、現代も風水地理説を用いた認識方法が行われており、やはり崔昌祚の分類では看龍法、蔵風法、形局論に該当するような認識方法が用いられている。また吾照里では風水的に「よい場所」が認識されていた。

II章で述べたように、崔昌祚の分類は風水の術法を、看龍法、蔵風法、得水法、定穴法、坐向論、形局論の六つに分けているが、図8に示したように、形局論を除いて徐々にスケールダウンしている。即ち看龍法が最もスケールの大きい判断を行い、坐向論は既に立地の決定した建築物や墓の方位を決めるといふ、最もスケールの小さな、微調整に近い判断を行うものと思われる。本稿で扱った、風水地理説を用いた地形の認識という側面では、六つの術法の中でもスケールの大きい看龍、蔵風、そしてスケールにあまり関係のない形局論に該当するような認識が行われている。

冒頭にも多少述べたが、風水地理説による立地選定・空間配置のための基礎的な作業としての見立てはそれだけにとどまらず、同時に周辺の自然環境、とりわけ山や河川などに関する知識を体系化するためにも利用されてきたように思われる。とくにII章で扱った清道の邑志の記載をみると、山のつながりや、風水用語による山の位置づけ（主山、小祖山）を行う中で地形に関する情報が記されている。このように朝鮮

時代においては、近代以降の地理学の代わりに風水地理説が、知識を体系化する役割を担ってきたといえるのではないだろうか。また現代の韓国においては、もちろん地誌書などに風水的な認識は記されていないが、本稿で扱ったように農村地域では、周囲の地形が風水地理説の論理で認識されており、朝鮮時代までに完成された風水地理説という別系の地理学が現在も存在しているように思われる³⁰⁾。また韓国の農村地域の老年層にとって、風水的な知識はかなり一般的なものになっているように思われる³¹⁾。

最後に、今回得られた結果から本研究の展開の可能性について二点述べ、さらに今後の課題について記しておきたい。

まず第一に、このような認識は風水地理説の伝播した東アジアではかなり一般的であると考えられるが、風水地理説を用いた地形の認識はどこでも大きな差はないと思われ³²⁾、本稿で明らかにしたものと同様な認識と、地形に対する意味の付与がなされている可能性がある。また、事例としてあげた吾照里では、住民に風水的な「よい場所」が認識されているわけであるが、これはおそらくは風水地理説でいう「穴」を指していると思われる。即ち、地形的には青龍・白虎に囲まれた領域の中心部、あるいは小さな尾根の先端を指している。このような認識が他地域でも行われているとすれば、同様な場所を「よい場所」と認識している可能性があり、風水地理説が東アジアの場所性の形成に重要な役割を果たしていると思われる。

次に、朝鮮時代の邑誌では、風水地理説の論理に沿うような形で地形が記述されているが、このような認識が朝鮮時代末期において行われていたということは、現在の西洋起源の地理学とは異なった環境認識が行われていたことになり、たとえば白頭山を根源とした、稜線（脈）のつながりにおいてある地域の位置づけがなされていたことなどをみると、当時の朝鮮時代のさまざまな地理的事象についてもこのような認識が用いられている可能性があり、重要であると思われる³³⁾。

また今後の課題として、第一に、本稿では詳細に触れることができなかったが、認識の主体についてより詳細な検討が必要であり、とくにⅢ章で取り上げた現代の韓国農村における地形認識についてはそのような認識の主体や、そのような認識方法がどこからきたのか、などの点について今後調査を重ね、把握することとしたい。またそれに関連して、済州道北済州郡旧左面吾照里において、風水的な「よい場所」が多くの住民に認識されている点について、上記の点と併せて、稿を改めて言及することとしたい。

(神戸大学文化科学研究科)

〔注〕

- 1) 村山智順(1931)：『朝鮮の風水』朝鮮総督府。崔昌祚(1984)：『韓国の風水思想』(韓国語)民音社。
崔昌祚(1990)：『よい地とはどこを言うのか』(韓国語)ソヘムンジブ。
李夢日(1992)：『韓国風水思想史研究』(韓国語)日駟社。
朴時翼(1987)：風水地理説の発生背景に関する分析研究、高麗大学校建築工学科博士学位論文。などが代表的なものであると思われる。
- 2) 例えば漢陽(ソウル)と風水地理説の関連では、
李丙燾(1938)：李朝初期の建都問題(韓国語)、震檀学報、9、30～85頁。
崔棟(1972)：漢城遷都と新都の建設(韓国語)、『韓国学研究叢書(二)』成進文化社)、160～187

頁。

任徳淳(1984)：漢陽が朝鮮の首都に選定された理由：政治地理学的接近(韓国語)、忠北大学校論文集、27、361～371頁。

などの研究があり、村落との関連では、

柳在憲(1979)：農村景観の形態的研究：驪州・利川地方を中心に(韓国語)、地理学論叢、6、96～115頁。

洪賢玉・崔基燁(1985)：南陽洪氏同族社会集団の地域化過程(韓国語)、地理学研究、10、383～424頁。

李廷根(1978)：韓国自然部落の形態空間論(韓国語)、蔚山工大研究論文集、9-2、37～118頁。

などをあげることができよう。

- 3) 洪慶姫(1986)：『村落地理学』法文社、166～167頁。

金萬亨(1990)：『韓国の河川地形』古今書院、2～3頁。

などがあげられる。

- 4) 渋谷鎮明(1991)：李朝邑集落にみる風水地理説の影響、人文地理、43-1、5～25頁。

- 5) 前掲1)、李夢日、34頁。

- 6) 前掲1)、村山智順、205～294頁、および750～760頁。

- 7) 鐸木昌之(1992)：『北朝鮮』(東アジアの国家と社会-2)東大出版会、185～194頁。

- 8) 次に示すような研究では、風水を用いた地形認識について事例をあげながら説明している。

前掲1)、李夢日、245～258頁。

金鍾大(1989)：島嶼地域の風水説話の風水地理的解釈(韓国語)、全北大教育大学院修士学位論文。

金光彦(1993)：『風水地理(家と村)』(韓国語)、デウォン社。

- 9) 村山も、風水の方法を看龍法、藏風法、得水法、定穴法に分類して述べている。また朝鮮半島における基本的な風水書である『錦囊経』も、気感篇、平支篇、山勢篇(看龍法に該当)、四勢篇(藏風法に該当)、貴穴篇(定穴法に該当)、形勢篇(形局論に該当)に分かれており、崔昌祚の分類と類似点が多く、崔昌祚の分類は朝鮮風水を整理するうえで妥当であると思われる。

- 10) 『捩里志』は朝鮮時代に李重煥(1690～1756)

- が著した地理書であり、実地踏査を基に士大夫が住むべき地を、地理(風水地理説)、生利(経済活動)、人心、山水(自然景観)などを判断基準に述べたものである。風水地理的な判断も随所にみられるが、風水地理説の術法のみを記した風水書とは内容が異なっている。
- 11) 前掲1), 崔昌祚, 274~285頁。
また各地理誌の山川條には、各行政単位(郡)毎の山と河川について、その位置や邑からの方角等が記されている。
- 12) 尹弘基(1991): 大東輿地図の地図族譜論的研究(韓国語), 文化歴史地理, 3, 37~48頁。
- 13) 盧道陽(1963): 八域志「可居地」解説(韓国語), 地理學, 1, 91~96頁。
徐樹仁(1963): 捫里志研究序説(韓国語), 地理學, 1, 83~90頁。
三浦国雄(1994): 風水説と福地思想—「捫里志」の場合—(渡邊欣雄・三浦国雄編『風水論集』凱風社), 51~73頁。
- 14) 国家(朝鮮半島)全域を何かの形にたとえ、国家の吉凶を判断するもの。
- 15) 大東輿地図では、山が切れているような場所も、尾根線を描くときと同様に分水嶺で連続させてある。
- 16) 尹弘基によれば、この大東輿地図は現在でも韓国で見られる「風水図」の影響を受けて作られていると主張している。彼はある地図にそれ以前のどのような地図が影響を与えているかということを明らかにしようとする「地図族譜論的」研究で、作者である金正浩の生涯を追い、朝鮮半島において墓の位置などを示した「風水図」にみられる表記法、即ち風水の善し悪しを決定する山と川を中心に描く方式を取り入れていると主張している。
前掲12), 40~45頁。
- 17) 申景濬(1913, 1990復刻): 『山経表』, プルンサン(原版は朝鮮光文会)。
- 18) このような認識は、朝鮮(李朝)時代の庶民層の建築儀礼、とくに地ならしや上梁祭に際して歌われた「成造歌」などに、白頭山から主山(鎮山)になる山への連続性が歌い込まれている。
西垣安比古(1994): 朝鮮の「すまい」と風水思想(渡邊欣雄・三浦国雄編『風水論集』凱風社), 333~361頁。
- 19) 楊普景(1987): 朝鮮時代の邑誌の性格と地理的認識に関する研究(韓国語), ソウル大学大学院地理学科博士学位論文, 8, 41頁。
- 20) 崔昌祚(1986): 月岳山彌勒寺址明堂の風水解釈(韓国語), 都市および環境研究, 1, 65~81頁。
- 21) 韓国学文献研究所編(1985): 『韓国地理志叢書 邑誌八 忠清道②』(影印本), 亜細亜文化社, 474頁, (「洪州牧邑誌」山川條)。
- 22) 韓国学文献研究所編(1982): 『韓国地理志叢書 邑誌二〇 慶尚道④』(影印本), 亜細亜文化社, 1070頁, (「清道郡志」)。
- 23) 「・・・蓋以断石山大幹龍之一枝西出逶迤横亘百有余里至于鰲邑。近甲之墟单峰屹立圓秀正直其高造天名之曰甲峰特為小祖山。甲峰一枝西出一枝轉而過省峴峽再轉而八助峽三轉而栗峴西走三十余里為琵琶山。琵琶山一枝南去過馬峙峽轉轉為甲乙嶺又東走郡地仇佐之境過斤峙峽又過昆乙峙行数十里為屯徳山。屯徳之一脉過一峽北措為華岳山為郡地主山則名之曰鰲山也。甲峰之一枝東南過熊峙峽又轉而為中山又轉而過樅峽南去為烏禮山城因為楡川驛主山古稱地理為回龍顧祖而與屯徳之東枝相對關鎖為一境水口也。紫川之流其源出自琵琶山南洞直過豊角縣至于郡内為北川彎回至楡川水口南注入于密陽之凝川。断石山之一枝過慶州義谷驛後嶺嶙峋起伏層疊峻極為雲門山。山之東峽為彦陽縣之山水西峽為本郡之山水曲曲為勝地至于密陽之境大川由其中其源有二。一出雲門寺洞一出東京之界合流于上東面南走百余里至于楡川與紫川合流為岐淵淵為清密之境也。」
- 24) 「・・・又云官基謂之仙人掌形又云郡之主山謂之飛鳳形・・・」。
- 25) 水口については、たとえば中国の風水地理説について研究を行った何曉昕によると、山が狭まり、しかも河川が合流する「水口関鎖の地」について、そこが村や都市の入り口に当たるような重要な場所であり、中国東南部の農村では水口が強く意識され、塔や台などのモニュメントが作られていることを指摘している。
何曉昕(1990): 『風水探源』(中国語), 中国東南大学出版社。
- 26) 前掲1) 李夢日, 245~258頁。

27) 1990年8月に行った現地調査時の李象衡氏へのヒアリングによる。

28) 済州大学校耽羅文化研究所(1990)：『耽羅文化叢書(8) 済州島部落誌(III)』(韓国語)，402～403頁。

29) 1993年9月に行った現地調査による。

30) 沖縄・中国を中心として風水地理説について幅広い研究を進めている渡邊は、各地域の居住者の風水に関する知識を西洋科学的知識で分断せずに扱うべき「東洋地理学」であると主張している。これは本稿において筆者が地域住民の認識を問題にした点、また風水地理説を現代の地理学と並存する「別系の地理学」として結論づけている点と基本的に合致している。

渡邊欣雄(1990)：『風水思想と東アジア』人文書院，21頁。

渡邊欣雄(1991)：漢族の風水知識と居住空間，国立民族学博物館研究報告，14，199～248頁。

渡邊欣雄(1994)：『風水 気の景観地理学』人文書院，98～99頁，280～281頁。

31) たとえば筆者が予備的調査を行ったことのある，韓国慶尚北道星州郡月恒面安浦里に居住する李仁洙氏は，墓地風水について，とくに墓地の立地や配置について豊富な知識を持つが，氏によれば，墓地選定に関する風水的知識は，とくに意識的に学んだものではなく，社会生活を行ううちに身についたものであるという。

32) 例えば，前述の何曉昕は，現代中国の農村において，本研究でいう形局論的認識が「喝形」と呼

ばれ，広く用いられていることを示し，また常見は，中国南部からタイ北部にかけて居住するヤオ族が焼畑にともなう集落移動の際に，青龍・白虎などの風水用語を用いて見立てを行い，新しい集落を形成することを報告している。

前掲25)，345頁。

常見純一(1994)：ヤオ族の移住と村落の形成——マーン＝ラーオ＝トン(「国見」)を中心として(渡邊欣雄・三浦国雄編『風水論集』凱風社)，253～275頁。

33) 奄美・沖縄地方における寸法による吉凶判断について言及した小口は，研究の展開の可能性として，歴史地理学的展開として，やはり過去における人間集団の価値観の重要性について触れているが，本稿も同様の展開が可能なのではないかと思われる。

小口千明(1994)：寸法による吉凶判断と住居景觀—奄美・沖縄を事例として—，地理学評論，67-9，638～654頁。

〔付記〕

本稿は，1992年6月に人文地理学会地理思想部会において発表した内容に加筆修正を行ったものである。なお，本稿で扱った資料のうち，清道郡邑誌の読解については大阪市立大学の野崎充彦先生(朝鮮文学)の協力を得，また済州島調査の際には韓国漢陽大学校建築学科の朴勇煥先生，済州大学校の梁澤訓先生の御助力を得た。記して感謝いたします。

LANDFORM COGNITION BY PUNG-SU THOUGHT IN KOREA

Shizuaki SHIBUYA

Pung-su (Feng-shui, 風水) is a kind of East Asian traditional geographical thought. The purpose of pung-su is to seek human felicity by the help of ji-ryuk (地力), a composite of ground forces. It is thought that ground forces give good luck to people who select favourable sites for their building, settlements or ancestor's burial grounds. It is generally said that also landscape of Korea has been influenced by pung-su.

Over the past few years considerable number of studies have been made on pung-su in Korea. Especially, many articles have been devoted to the study of characteristics of Korean pung-su and influence of pung-su in Korean settlements. But so far the study of landform cognition by pung-su has been superficial. This is not only an important process of finding favourable sites by pung-su, but one of a Korean traditional view of nature.

The purpose of this paper is to clarify how the landform is recognized by pung-su in Korea. The author concerned with landform cognition during late Chosun era and landform cognition in modern Korean settlements as the object of this study.

The landform cognition during late Chosun era was mentioned by Eup-chi (邑誌), a geographical record, and expressed by maps like Daedong-yojido (大東輿地圖). We can find a characteristic of landform cognition by using these materials as follows:

1. Daedong-yojido adopted special method of expression that gives weight to connection of ridge lines. And this method was systematized in Sangyunpyo (山經表). According to Choi's classification, this kind of cognition is similar to Kanryun-bop (看龍法), one of the pung-su method.

2. The description of landform in Eup-chi compiled in 1871 used many pung-su terms like ju-san (主山), an-san (案山), su-gu(水口) and so on. For example, principal mountains and rivers were recognized by using pung-su terms in the description of landform in Chundogunji (淸道郡誌), one of the Eup-chi.

According to Choi's classification, this kind of cognition is similar to Kanryun-bop (看龍法), Chanpung-bop (藏風法), and Hyunggug-non (形局論).

The landform cognition in modern Korean settlements was also recognized by pung-su methods like Kanryun-bop (看龍法), Chanpung-bop (藏風法), and Hyunggug-non (形局論), according to author's survey in Toero-ri, Kyungsan-namdo, and Ojo-ri, Cheju Is. in Korea. Especially, we found that there is a favourable site in a viewpoint of pung-su in Ojo-ri.